

昭和二十五年度

敗戦から苦難の五年間

成毛秀臣
(旧名英臣)

昭和十九年、漸く大東亜戦争の影響が我々中学生にも及んで来た頃でした。前年普通部四年の時の檜原神宮奉納の全国中学生大会東京予選にベストエイトに残りながら最終選考で五人の選手（補欠一人）に入れなかつた私は、二段に昇段し、普通部の主将となり、又春の済寧館での御前試合に選抜され、勝利を手にして絶大の自信を付けて、その年の東京予選に出場しました。

一週間前に疎開家屋の引倒しの勤労奉仕で踏み抜きをして右足の裏を腫ませてはいましたが、どうせ大外刈も大外巻も右足の裏は地に付けないからと気にもせず、又その為か早く勝負に出て殆んど一分以内に一本勝しました。決勝では後に慶大入学後、野球部に入り、外野手として慶法戦で神宮球場の三八〇フィートを越すホームランを打込んで有名になった高橋久雄君に当り、試合後、慶応に受験する事、入学の頃には互いに三段になつてゐるだろう事を話し合つた思い出が有ります。

此の大会に折角優勝したのに戦争悪化の為檜原神宮の大会は中止されてしまいました。又同年の東京市中学校の団体戦では慶應義塾普通部として、四年飯塚一陽・中野孝三郎・佐藤孝一・五年成毛英臣・横川克男のメンバーで三位入賞しました。

昭和二十年、水道橋際の講道館大道場が焼けて、女子部の道場で良く菊池揚二先生と稽古したのを思い出します。

「発体一〇〇号」昭和二十年十二月二十六日文部省体育局長の名で『昭和二十年十一月六日「発体第八〇号」文部次官通牒により武道（剣道・柔道・薙刀・弓道）の授業は之を中止、且つ校友会運動部等学校に関与する施設に於ても之を実施せしめざることと致たるも個人的趣味等に基く実施に關しては尚誤解を招く虞あるを以て爾今学徒の發意如何に不拘学校内又は学校付属の施設に於ては一切之を実施せしめざること』の通牒が出され、この学校柔道の禁止は昭和二十五年十月まで続きました。

昭和二十二年八月に當時市原訓練所（加藤寛治の満蒙開発）の解散に伴い熊本県に帰るのに一考を案じた訓練所柔道師範広岡孝明（當時六段）氏は、慶大柔道部を中心に九州遠征試合を企画しました。

水谷五段を大将に成毛（英）四段、飯塚三段、山中二段、成毛（雅）二段、それに訓練所の野口五段（現在ハワイ角力解説者で柔道、空手、合氣道の道場経営）と三輪四段（三越勤務）が加わり、表面はレスリング、ボクシングの紹介と銘打っていすれも慶大レスリング部、ボクシング部の部員を集め、鈍行列車で二日掛つて熊本入り土地の新聞には一面に「慶大柔道部来る」と宣伝され、熊本歌舞伎座を貸り切つて昼夜二回、興業試合行つた、詳細は水谷英男主将が書かれるのでお任せしますが、當時日比谷映画劇場が税金共で七円三十何錢の時、熊本歌舞伎座の入場料が何と一金十円也でしかも超満員の盛況でした。人吉市でも二回興業、他は一回でしたが、魚村の松橋（マツバセ）に行くのにトラックに畳を乗せてそれに上乗りした我々は野口君の浪曲を聞きながら、しみじみと地方回りの劇団の気持を味わつたものでした。

昭和二十三年、ここ一、三年夕方に行つていた寒稽古を交通事情の緩和から朝七時より豊沢の飯塚先生の至剛館道場で行つた。一月十二日より十五日間、毎日約十人が集り、羽鳥、小坂先輩が参加された。



学生柔道禁止中、至剛館道場玄関にて

二月一日に卒業生送別試合を行った。

個人の試合では、三月の講道館の月次で二人抜き大将大沢君と引き分け四月の道友会では四段の準決勝で判定僅差で大沢君に破れ、大いに不満で試合後主審菊池先生に噛みついた思い出が残っている。

六月六日に五段昇段の通知を受取った。私に亘りますが当時は野球全盛で私も日曜ごとに神奈川県で野球の試合をしたり夜は麻雀で遊んだり、アルバイトにはスイングバンドを編成して各学校のパーティに出演して大変充実した日々を過していました。

昭和二十四年は一月十日（月）より一十三日まで寒稽古を行う。精勤者成毛韶夫、熊切昭男、荻原正夫、以上毎日十二、三人が参加しました。亦、一月三十日に卒業生の送別試合を行いました。二月二十五日夕方富沢宅で社会に巢立の方々を祝いました。水谷、中西、益子、笠原、高木、工藤、島、長田、飯塚、富沢、私が出席しました。

私は、この年一月二十五日より二月二十五日迄一ヶ月の長期卒業試験があり、慶應義塾大学附属医学専門部を卒業十日後編入試験を受けて法学部政治科三年に編入、以来二年間を三田山上に学びました。

昭和二十五年？日吉道場開きに清水正一師範と投の形を行い、宮崎、熊切君等五人と掛け試合を行いました。

十月学校柔道が認められ毎日新聞が三田綱町の道場に写真を撮りに来て感想を述べさせられましたが、記事は全く異ったものが載っていました。以上の如き戦中戦後に亘る混沌とした時代は塾柔道部にも大きなショックであったが、省みてよくこれまでやつて来たものだと、改めて伝統の力強さを銘肝するものであります。

主務
・
島 東資

中野孝三郎
中野孝三郎

進級月次試合

月 審 次 次

12 ○	11 ○	10 ○	9 ○	8 ○	7 ○	6 ○	5 ○	4 ○	3 ○	2 ○	1 ○
小 大 小 小 川 郡 中 高 高 頭 田	水 白 石 石										
川 島 川 川 西 西 松 松 松 松 山 中 (輝)	野 野										

出足 扑	引 分	背負 技	大外 落	合 技	大外 刈	引 分	引 分	優 勢	大外 返	大外 刈	足 扑
------	-----	------	------	-----	------	-----	-----	-----	------	------	-----

白 小 ○	大 田 ○	小 川 ○	郡 中 鈴 富	頭 富	萩 奥 大
石 川 島 中 川 西 西 木 (澄)	(岩) (造) 田 田 田 田	山 (立)	原 岛 原 田		

一月二十八日

幼

稚

舍

進級月次試合

5 ○	4 ○	3 ○	2 ○	1 ○	九級へ	五級へ	四級へ	二級へ	高松 静男	頭山 立國	右の結果、進級・編入せし者左の如し。
川 野 松 垣 園											22 ○
島 坂 岡 内 田											21 ○

引 分	崩裂 委	引 分	引 分	大内 返	水野 耕三	白石 英一	大外 刈	大腰	引 分	払 腰	大外 刈	優 勢	背負 技	袈裟 固	大外 卷込
-----	------	-----	-----	------	-------	-------	------	----	-----	-----	------	-----	------	------	-------

○ 川 野 松 垣	○ 島 岸 岡 内	○ 田 坂 岩 原 越	○ 乾 鈴 堀 奥 木	○ 木 田 内
-----------	-----------	-------------	-------------	---------

二月二十五日

月 審

15 14 13 12 11 10 ○ 9 ○ 8 ○ 7 ○ 6 桜 5 ○ 4 持 3 2 1 次
 成川 小田 河 河 深 深 深 桜 桜 持 田 頭 持
 毛 西 原 中 合 合 山 山 山 井 井 田 中 山 田
 6 ○ 宮 島

足 扑
 扑 卷 引 足 引 大 内 背 背 大 外 足 足 大 外 足 引 引
 分 扑 分 返 投 抱 外 返 扑 扑 返 扑 扑 刃 内 股
 習 妻 固 分 扑 分 扑 分 扑 分 扑 分 扑 分 扑 分

○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○
 木 成 川 小 田 神 河 中 酒 深 鈴 桜 持 田 頭 田
 内 毛 西 原 中 田 合 西 泉 山 木 井 中 山 中 (信)
 (清) (澄)

右の結果、進級・編入せし者左の通り。
 九級へ 園田成和、川島宏之、垣内鎮夫、宮島樟一、松岡
 鎮夫、田村嘉男、野坂要史治
 七級へ 編入 持田栄一、桜井宏昌、田中信行
 六級へ 編入 酒泉 弘
 五級へ 深 山 静 也
 四級へ 田中精一郎、河合靖文
 三級へ 奥田倉三
 二級へ 乾 俊夫

25 24 23 22 ○ 21 20 19 18 17 16
 頭 太 萩 太 水 太 水 鈴 奥 木 田 内
 山 (立)

優 扑 引 優
 勢 腰 分 勢
 阿 田 水 田 萩 田 太 田 乾 鈴 奥
 部 坂 野 坂 原 田 坂 木 田

春季合宿と学期中の稽古（大学）
 春季休暇を鐘紡山科工場に合宿した部員は、新学期の開始と共に豊沢道場（至剛館）にて稽古を始めた。一週

六日、そのうち金曜は特に先輩の御指導を仰ぎ七月の休暇まで続いた。

進級月次試合

四月二十二日

1	○松	本																																										
2	田	中																																										
3	○河	合																																										
4	小	川	合																																									
5	松	本																																										
6	田	中																																										
7	河	合																																										
8	○河	河																																										
9	萩	田																																										
10	○田	田																																										
11	奥	田																																										
12	○田	坂																																										
13	乾	坂																																										
14	○田	坂																																										
15	奥	坂																																										
16	○乾	坂																																										
17	○乾	坂																																										
18	○萩	坂																																										
原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原	原			
右の結果、進級・編入せし者左の通り。	大外巻込	大外	腰	腰	腰	腰	腰	腰	腰	腰	腰	腰	腰	腰	腰	腰	腰	腰	腰	腰	腰	腰	腰	腰	腰	腰	腰	腰	腰	腰	腰	腰	腰	腰	腰	腰	腰	腰	腰	腰	腰	腰	腰	腰

右の結果、進級・編入せし者左の通り。
○清水 正一(長野) 体落 田代 文衛(愛知)
田代は跳腰、清水は小内、大内の銳技をもつて互に応酬の後、清水右大内と巧みに崩した田代を体落に落して鮮かに勝つ。両雄の試合態度申分なく、本日白眉の胸のすくような一戦であった。試合時間四分。

本大会は故嘉納治五郎先生の命日を期し、先生を偲び、全国より二百名を越える高段者が講道館に参集して行われた。

塾からは先輩阿部芳郎七段、師範清水正一七段が出席した。

(講道館主催 朝日新聞社後援)

五月四日 於 講道館

全国柔道高段者大会

九級へ 星野 弘、安藤達夫
八級へ 鈴木正毅、永井進

七級へ 金成禧徵、五十嵐奈利

六級へ 桜井宏昌、頭山統一、平本常雄、広瀬久也

五級へ 松本好生

四級へ 小川岩夫、成毛韶夫

三級へ 蔵重彰男

二級へ 田坂 昭、萩原正夫、太田伸児

一级へ

月 次 試 合												審 査		進 級 月 次 試 合		○ 阿 部 芳 郎 (東 京) 浮 落 西 村 錠 夫 (千 葉)	
16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	○	伊	5	4	3	2	1	○ 阿 部 芳 郎 (東 京) 浮 落 西 村 錠 夫 (千 葉)
広	小	羽	羽	大	長	伊	伊	○	○	平	金	長	小	金	本	成	西 村 橫 捨 身、巴に阿部を強襲するも効なし、機を見て放つた阿部の左浮落、見事に極つて一本。
瀬	野	成	成	谷	戸	戸	藤	藤	(照)	成	井	野	成				
穩																	
大内合引大内押引内足優足 大内返技分刈込分股払勢払																	
○	○	伊	広	小	金	羽	大	山	○	田	稻	高	長	○	山	大	西 村 錠 夫 (千 葉)
藤	瀬	野	成	成	谷	際	戸	久	保	田	松	戸	際	谷	際	谷	六 月 十 日

月 次 試 合												審 査		進 級 月 次 試 合		○ 阿 部 芳 郎 (東 京) 浮 落 西 村 錠 夫 (千 葉)											
4	3	2	1	査	進	級	月	次	試	合	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	○ 阿 部 芳 郎 (東 京) 浮 落 西 村 錠 夫 (千 葉)
浜	砂	渡	長								乾	乾	堀	鈴	鈴	成	成	成	成	奥	奥	奥	奥	奥	田	伊	
野	田	部	島								越	木	木	毛	毛	田	田	田	田	田	田	田	田	中	藤	藤	
引 分 引 分 引 分 大 内 刈 内 股 払 巻 达 引 分 大 外 刈 扞 腰 大 内 刈 引 分 大 内 返 大 内 返 背 負 返 引 分 大 内 刈 内 股 扞 巻 达 引 分 大 外 刈 扞 腰 大 内 刈 引 分 大 内 返 大 内 返 背 負 返																											
○ ○ 金 長 山 成 戸 戸 際 七月 一 日																	○ ○ 平 田 高 本 中 松										
太	田	乾	乾	堀	鈴	乾	堀	鈴	鈴	成	成	堀	乾	平	田	高											
坂																											

昇

月

13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 次 13 12 11 10 9 8 7 6 5
 大依 依 依 依 砂 長 永 永 塚 塚 烏 伊 田 久
 谷 田 田 田 島 井 井 本 本 海 藤 保 見 中 中 藤 本 田 田 戸 海

袈 婆 大 合 足 小 引 背 袈 婆 合 袈 婆 引 引 優 体 小 外 落 袈 婆 引 引 引
 固 内 刈 技 扱 内 刈 分 负 投 固 技 固 分 分 勢 固 分 分 分

○○○ 渡 浜 依 砂 長 田 ○ 永 烏 伊 稲 稲 ○○○○○
 小 大 部 野 田 田 島 中 井 海 藤 田 田 広 羽 頭 永 羽 小 桜 山
 野 谷 成 成 山 井 成 野 井 際
 (浩 稔) (詢)

36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14
 蟻 飯 鈴 飯 鈴 蟻 小 小 飯 飯 平 平 高 櫻 広 頭 長 長 金 金 山 小
 川 川 塚 木 塚 木 川 川 川 塚 塚 本 本 松 井 瀬 山 戸 成 成 際 野

大 内 上 四 方 外 刈 大 外 刈 引 引 引 大 内 刈 合 大 内 引 扱 卷 达 合 引 橫 四 方 優 引 大 外 刈 引 引
 内 返 西 外 刈 外 刈 分 分 分 分

○○○○○○○○ 飯 成 成 成 小 小 小 水 ○ 水 平 水 小 大 高 櫻 広 頭 羽 長 佐 金 山
 塚 毛 毛 川 川 川 谷 塚 谷 本 谷 川 島 松 井 瀬 山 成 戸 藤 成 際
 (隆)

37 ○ 鰐川	37 ○ 鰐川
38 ○ 鈴木	38 ○ 鈴木
39 堀越	39 堀越
40 ○ 乾	40 ○ 乾
41 堀越	41 堀越

引分 大外返 ○ 乾 成毛 飯塙

優勢

鈴木

飯塙

成毛

大外返

○ 乾

成毛

飯塙

優勢

右の結果、進級・編入せし者左の通り。

九級へ 鶴見重之
 八級へ 編入 塚本英夫、長島照男
 七級へ 編入 長島慶一、渡部健吾、砂田実、浜野充功、依
 六級へ 編入 田正明、田中浩司
 五級へ 高松静男
 四級へ 飯塙国基
 三級へ 成毛韶夫

柔友会報告より

七月

記

一、客員も追々増加して参り、約九十名（学部三十名、高等学校四十名、中等部二十名）が至剛館道場に於て、学生柔道の復活への希望を抱き乍ら、毎日稽古に親しんで居ります。

二、昨年八月客員十八名が信州松本宮田製作所工場に於

て待望の合宿を実現し、清水師範の滴水館にて同範師御指導の下に稽古を行いました。更に本年三月末日より十日間、会員山田久一、小川虎之助両氏の斡旋により、鐘紡京都山科工場洛東荘に合宿致し、同工場所属社員と稽古を交歓致す等、客員の志氣も日を追つて旺盛となりつつあります。

三、昨年十一月には第三回三田対稻門柔道試合を挙行、十対七で三年連覇の成績を挙げました。

四、昨年十月下旬の東西対抗柔道試合（於大阪）に羽鳥（輝）（東軍大将）水谷（英）両君が出席し各々一勝の後敗れました。

五、本年五月、講道館高段者大会には阿部（芳）君が出場、技能賞を授与されました。

六、同月全日本選手権大会には羽鳥（輝）君が東京代表となり出場しましたが二回戦で敗れました。

七、五月三十一日本年度総会に於て、本会々員の昇段に關し講道館より申入があった場合、協議回答する機関として昇段選考委員会を設置することが決定され、各年代から中野森蔵、山田久一、阿部英児、阿部芳郎、近藤漸、山崎高の諸君に委員を御願した。

八、義塾体育会OB団体を構成員とする三田体育会が結



全鐘紡対戦記念 1950・7・21
(於、中島工場)

成され、本会からは平沼亮二氏が会長に阿部芳郎、秋山正、羽鳥輝久の諸君が常任委員となり、三月の会合に於ては体育会ホール建設に協力する事に意見の一一致を見、義塾体育会の前途にも明るい話題を投げかけて居ります。

夏季合宿（大学）

七月十六日より十二日間
於 大阪 鐘紡中島工場

七月十六日より十二日間、大阪の鐘紡中島工場に合宿し、その間に鐘紡、全関西軍と試合を行い左の成績にて勝利を得た。

本塾

先鋒 ○ 鈴 小川

○ 荒 ○ 荒 ○ 荒 ○ 荒 成 鈴 木 木 木 木 木 木 木

鐘淵紡績

先鋒 ○ 茶 谷

○ 沢 若 沢 田 村 松 田 木

月 審

次 2 1 次 進級月次試合 ○
印 佐 成 大將 ○
藤 木 佐 堀 渡 熊 田 菅 萩 稲 美 太 乾
木 崎 宮 水 部 高 切 前 部 切 坂 原 原 田 沢 田
毛 内 部 部 橋 切 前 部 切 坂 原 原 田 沢 田

優 引

勢 分

○ 小 浜
川 野

大將 ○
月日不明 安 小 浜 佐 佐 金 金 佐 細 細 遠 遠 島 村 五 十 歳
田 越 田 田 藤 藤 藤 藤 江 江 藤 藤 田 岡 五 十 歳

百年の歴史を誇った吾が柔道部も、終戦と共に学校柔道禁止令により体育会を離れなければならなくなり、三田綱町道場及び日吉道場の使用も不能となつた。我々は三田柔友会に客員として入会し、稽古を三田警察署・済寧館又は至剛館(豊沢道場)を転々しつつ継続していたが

學生柔道復活と体育会へ復帰

14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
乾	永	○	小	奥	小	奥	鈴	永	奥	小	小	小	小
井	川	田	川	(岩)	川	(浩)	田	木	田	井	川	川	川
								(昇)			(浩)	(浩)	(岩)

背負投
大外刈
引分
引勢
引分
引分
引分
引分
引分
引合
技分
落分
落分

○	鈴	○	鈴	○	鈴	○	鈴	○	鈴	○	鈴	○	鈴
成	永	奥	永	鈴	木	成	成	成	木	成	永	井	田
毛	田	井	木	(昇)	木	木	木	木	(昇)	毛	田	毛	田

十月十三日

戦前は二百余名を数えた部員も僅か二十名あまりとなつて前途は暗澹たるものであった。

昭和二十五年九月待望久しきた学校柔道復活の吉報がもたらされ、四年に亘る荆の道は開かれた。そして柔道部は十月十三日正式に体育会に復帰した。ここに柔道部が再び戦後の隆盛に向わんとするにあたり、体育会誌再刊第二号(体育会誌六十周年記念号)各部報告の頁で柔道部は学校柔道の辿った道を次の様に振り返っている。

『明治十五年に創始された講道館柔道は過去の柔術を止揚したスポーツであり、その創始者たる故嘉納先生は単なる武道家ではなく、進歩的な教育家体育家として広く世に知られた人であった。先生は柔道を体育として完成する為に一生を捧げて努力された。先生の考案された技術は大別して投、固、当身の三つであるが、学校柔道即ちスポーツとしての柔道は専ら投技と固技を採用し、当身技は單に形としてのみ存続して居たのである。然して此の柔道は広く国内に於て愛好されたばかりでなく、大日本体育会の初代会長でもあり、又オリンピック委員でもあった故嘉納先生を中心とした先導者達の努力によつて、フランス、スペイン、イギリス等にも多くの愛好者を生み出しやがてはオリンピック種目に加えられるよ

うになるだらうとの希望さえ抱かしむるに至つたものであつた。

然し満州事変に始まる變形的な時勢の進行と共に柔道も又次第に変貌を余儀なくされた。文部省令に現われた変化を辿るなら、昭和六年それまで中等学校令施行規則第十三条に、「体育は、体操教練遊戯及び競技を授くべし、又剣道及柔道を加ふる事を得」とあつたのを「体育は、体操、教練、及び柔道、遊戯及競技を授くべし」、と改正され、更に十一年文部大臣の諮問に対する全国体育運動主事会議の答申を契機として道場に神棚を設ける事が特に多くなつて來た(それまでは必ずしも道場に神棚があるとはきまらなかつた)。十六年小学校が国民学校と改称されると共に、今まで課外に行われて居た柔剣道を「体練課武道」と総称し、五、六年の必修とした。然もその具体的な教授内容には、柔道在来の教材の外に、必殺氣魄をもつて行われる当身技の一群が含まれて居た。更に廿年には学徒体練特別指導要綱が制定され、武技としての面のみを強調して白兵戦闘動作へ移行し野外での訓練を主とするようになされたのである。

戦後学校体育より軍事的なものを排除すべしとする連合国指揮により学校柔道は禁止され、又社会人の柔道

月 次 审 査 進級月次試合 十月二十一日（土）

次	9	8	7	6	5	4	3	2	1												
	○	○	○	○	○	○	○	○	抱												
	金	鈴	田	大	鈴	頭	鈴	大													
成	木	中	谷	木	山	木	谷														
力	浩								勇	雄											
三	郎	司	澄	澄																	
大	外	刈	送	糸	引	分	引	分	優	勢	払										
鈴	田	高	高	抱	鈴	林	砂	○	大												
木	中	木	木	木	木	田	谷														
力	三	郎	總	正	瑞																
			輔	道	夫	力															

熱も一時屏息したが時と共に再び盛となり、二十三年に
は講道館入門者が四一二六人に達した程であった。注目
すべきは外人入門者で、戦後三年の間に五五六名を数え
ている。（戦前の総数六二一九名）又海外スペイン、ポル
トガル、フランス等からは講道館に指導員の派遣方を申
込んで来たが、此れらの事は柔道が次第に国際スポーツ
化している事を明白に物語っている。これらの社会的、
国際的な動きと共に、学校柔道も二十五年十月十三日、
遂に再開を許されたのであった。』

四 級	七級から五級まで																		
2	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
小	部	広	鈴	羽	羽	長	桜	金	鈴	渡	渡	渡	長	田	鈴	砂	砂	抱	抱
川	川	瀬	木	成	成	戸	井	成	木	辺	辺	辺	島	島	中	木	田	木	
(弟)													(健)						

引	体	優	優	合	優	大	内	外	内	引	足	釣	払	引	足	引	引	引	引
分	落	勢	勢	技	勢	刈	刈	刈	股	分	払	込	腰	分	払	分	分	分	分

水	高	田	広	鈴	頭	羽	○	○	○	○	林	砂	渡	大	長	田	鈴	砂	砂
谷	松	村	瀬	木	山	成	戸	井	成	木	木	田	辺	谷	島	中	木	田	木

(正)

3 水谷

一・三級の部リーグ戦

1 永井

○

2 奥田

○

3 永井

○

4 小川

○

5 鈴木

○

6 奥田

○

7 飯塚

○

8 鈴木

○

無級より八級までリーグ戦

○

9 吉沢

○

10 伊藤

○

5 伊藤

○

4 吉澤

○

1 大伊藤

○

6 久保田

○

2 久保田

○

引分

引分 体優 大外返

優勢 背負投返 技分 体落分 体落分 引抱 分 優勢

引分

箱田

吉澤 鈴木 伊藤 伊藤 鈴木

小川 永井 永井 小川 飯塚 飯塚 奥田 奥田 小川

高松
小川(兄)

月

審

右の結果、進級・編入せし者左の通り。

七級へ編入

林瑞夫、抱勇雄、箱田浩輔、砂田力、

六級へ編入

鈴木澄夫、桜井宏昌、羽成貞一、

五級へ

高木総輔、鈴木力三郎

三級へ

小川浩二

進級月次試合

十一月十一日

查

次

13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
湯竹久西長川大竹西久染林大
浅木本木山島辺谷本山木谷

優勢

引分 大外巻込

引分 分 分

○ 染谷河宮西湯山久谷長佐川林
谷口内田山浅崎木口島藤辺

審

三級 二級の部 リーグ戦	五 四級の部	八級・六級の部		
6 5 4 3 2 1 田 河 高 鈴 鈴 桜 中 合 松 木 木 井	14 13 12 11 10 ○ 頭 長 佐 金 金 山 戸 藤 成 成	8 7 6 ○ 大 渡 田 田 谷 辺 中 中	5 4 3 ○ 長 伊 伊 島 藤 藤 藤 沢	1 吉

優 引 優 大 優 紋
勢 分 勢 別 勢 投

優 引 大 外 别 引 大 外 别
勢 分 别 分 别 分 别

引 背 负 投 引 分 体
分 分 分 分 腰 落

○ 木 田 河 高 広 鈴
内 中 合 松 瀬 木 (澄)

○ 金 頭 長 佐 金 鈴
子 山 戸 藤 木 (正)

○ 大 渡 田 高 田 長 箱 塚 伊
木 中 島 田 本 藤

審	右の結果、進級・編入せし者左の如し。	右の結果、進級・編入せし者左の如し。
7 6 5 4 ○ 3 ○ 2 1 新 坪 水 河 水 山 市 井 田 藤 内 藤 崎 川	七級へ 伊藤照彦 六級へ 彦、河内 五級へ 頭山統一 二級へ 奥田倉三	八級へ 編入 山崎 七級へ 伊藤照彦 六級へ 大谷 五級へ 編入 清、宮田逸郎、竹本泰一 二級へ 西山栄一、久木誠、染谷八郎
查	昇	昇
進級月次試合		

引 引 小 内 合 足 合 大
分 分 別 技 扱 技 腰

○ 奥 鈴 永
○ 奥 鈴 永
木 (昇)

長 塚 長 呉 林 ○ ○
島 本 戸 藤 藤

十二月十六日

七級の部	八級の部	九級の部	月次
6 5 4 3 2 1 高依林河竹伊 木田 内本藤(照)	6 5 4 3 2 1 谷塚永田吉 口本井久保井沢	5 4 3 2 1 鶴柿柿稻坂 見本本田倉	8 矢島

引 分	引 分	引 分	足 固	引 扱	優 勢	合 技
引 分	引 分	引 分	固 扱	足 勢	合 技	

林 河 竹 伊 依 谷	永 田 鈴 吉 塚 鳥	○ 柿 鳥 坂 ○ 柿 小	○ 谷
内 本 藤 田 口	久 保 木 沢 本 海	本 海 倉 本 野	口

二・三級の部	四級の部	五級の部	六級の部
2 1 高 高 松 松	6 5 4 3 2 1 田 鈴 羽 頭 伊 頭 村 木 成 山 藤 山	6 5 4 3 2 1 長 大 佐 鈴 金 近 戸 谷 藤 木 成 田	10 9 8 7 浜 長 田 砂 野 島 中 田(実)

引 分	大外刈	大内刈	大外返	優勢	内股	引 分	大外落	大外刈
引 分	大外刈	大内刈	大外返	優勢	内股	引 分	大外落	大外刈

木 羽	羽 羽	小 羽	羽 羽	田	金 田	金 田	大 田	長 砂	浜 高
内 成	成 成	原 成	成 成	村	成 中	成 中	谷 中	島 田	野 木

右の結果、	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
四級へ	奥	鈴	永	小	永	小	鈴	永	小	鈴	永	小	○	小	蟻
五級へ	坂倉	一郎	川	木	井	川	木	井	川	木	井	川	○	蟻	蟻
六級へ	柿本	亮司	編入	矢島	弘一	、吳	○	奥	鈴	○	鈴	○	○	○	○
七級へ	坪田	稔	、山崎慎之介	三宝	、新井陸		奥	鈴	永	堀	永	堀	○	奥	○
八級へ	坂倉	一郎	、小野英之				○	奥	鈴	○	鈴	○	○	○	○
九級へ							○	奥	鈴	○	鈴	○	○	○	○
進級・編入せし者左の如し。	大内返	引分	引分	引分	引分	引分	引分	引分	引分	引分	引分	引分	引分	引分	移腰
羽成貞二	田中浩一	永井	稔	塚本英夫	編入	水藤三郎	谷口勝亮	越	越	木	木	木	木	井	田川(弟)
長戸英夫	長島慶一	夫	坪田	稔	塚本英夫	編入	水藤三郎	谷口勝亮	越	田	木	木	木	井	田川(弟)

昇